研究報告

地域住民における居場所づくりに関連する用語の認知度

佐々木浩子[1)]　　吉田　修大[2)]

1）北翔大学教育文化学部教育学科　2）北翔大学生涯スポーツ学部健康福祉学科

抄　録

地域住民における居場所づくりに関連する用語の認知度を明らかにすることを目的に，大学祭企画の「ケアラーズカフェ@北翔大学」に参加した地域住民に対して質問紙調査を実施した。その結果，用語の認知度については，子ども食堂が最も高く，全体の54.8％の者が聞いたことがあると回答していた。次いで地域食堂，コミュニティカフェ，ケアラーズカフェであった。最も低いケアラーズカフェの認知度は全体の7.1％であった。また，大学祭企画への参加者の感想では，単純に楽しかったと回答した者の割合が最も多く，全体の66,7％で，このようなカフェの活動が地域の役に立つと考えている者は，全体の78.6％であった。本研究の結果から，子ども食堂の認知度が高い一方で，ケアラーズカフェの認知度は低く，活動の継続には地域住民への周知の必要性が考えられた。同時に，これらの活動が地域の居場所としての役割を期待されていることも考えられた。

キーワード：地域住民，居場所，認知度

Ⅰ．は じ め に

内閣府は2016（平成28）年３月のソーシャル・キャピタルの豊かさを生かした地域活性化の報告書において，人口面からみて活力が低下している地域ほど相対的に豊かなソーシャル・キャピタルを有していること，ソーシャル・キャピタルが豊かな地域では，そのことが人口の社会増，あるいは社会減の抑制に寄与している可能性が示唆されたと述べている[1)]。この報告書ではソーシャル・キャピタルを地域の持つ「ソフトな地域資源」であるとの認識に立ち，まとめている。

我々の研究グループでは，社会資源としてのケアラーズカフェに着目し，実践と研究を試みてきた[2)]。ケアラーズカフェは，その名前の通り，家族介護者であるケアラーの社会的な孤立の解決を目指した支援を目的に開催されているコミュニティカフェである。特に認知症カフェは，認知症の人とその家族への支援を地域で行う場として全国的に普及してきた[3,4)]。

2018（平成30）年７月17日現在にて，国立情報学研究所が運営する学術論文や図書・雑誌などの学術データベースであるCiNii　Articlesでキーワード検索を行うと，「コミュニティカフェ」112件，「認知症カフェ」73件，「ケアラーズカフェ」９件の順で検索結果が得られた。また，それぞれの検索結果で最も古い年は，コミュニティカフェでは2004（平成16）年，認知症カフェでは2013（平成25）年，ケアラーズカフェでは2012（平成24）年となっていた。これは，2012（平成24）年に厚生労働省認知症施策検討プロジェクトチームにおいてとりまとめられた「今後の認知症対策の方向性について」などに基づく，平成25年から平成29年度までの計画となる「認知症施策推進５カ年計画（オレンジプラン）」が，2012（平成24）年に策定された[5)]ことによるところが大きいと考えられる。その後，2015（平成27）年には「認知症施策推進総合戦略－認知症高齢者等にやさしい地域作りに向けて－（新オレンジプラン）」が，2025（平成37）年に向けて策定された[5)]。

さらに近年，コミュニティカフェは拡がりを続けており，地域食堂，子ども食堂と呼ばれる場の開設も始まっている。これらの用語について前述同様にキーワード検索を行うと，「地域食堂」７件，「子ども食堂」81件の検索結果が得られ，それぞれの検索結果で最も古い年は，地域食堂では2007（平成19）年，子ども食堂では2015（平成27）年となっていた。これは，2013（平成25）年に「子どもの貧困対策の推進に関する法律（子どもの貧困対策推進法）」が制定され，翌年2014（平成26）年１

月より試行された[6]ことが大きいと考えられる。特に，子ども食堂は全国的にも急増している一方で，貧困家庭の子どもへの食事提供だけではなく，子どもを含む地域住民の居場所づくりにも貢献している[7,8]。ケアラーズカフェ，子ども食堂など呼び名は異なっていても，地域の居場所づくりに貢献している点では同様の役割を担っており，今後コミュニティカフェの活動を拡げていくにあたり，地域住民における用語の認知度を知る必要があると考えられた。

こうした背景から，我々は改めてコミュニティカフェをはじめとする用語の認知度を明らかにすることを目的として，地域住民に対して質問紙調査を実施することとした。

Ⅱ　方　　法

対象者は，2017年９月30日に大学祭企画として実施した「ケアラーズカフェ@北翔大学」に参加した地域住民52名であった。このうち，子どもや未回答者を除く，41名（男性12名，女性26名，不明（回答拒否）３名）を解析の対象とした。

質問紙の構成は，個人属性，用語の認知度，大学祭企画に参加しての感想，ケアラーズカフェの活動についての考え，自由記述となっている。個人属性については，性別，年齢，就労状況について回答を求めた。性別は，男性，女性，もしくは答えたくないの，３件法とした。年齢は，10歳代から70歳代まで10歳ごとに年代を選択させ，80歳以上，答えたくないを含め，９件法とした。就労状況は，働いている（アルバイトなども含む）と働いていない，の２件法とした。

用語の認知度については，ケアラーズカフェ，コミュニティカフェ，子ども食堂，地域食堂の４つの用語について，それぞれ，聞いたことがあると聞いたことがないの，２件法にて回答を求めた。

大学祭企画に参加しての感想については，①単純に楽しかった，②外出の機会になった，③身体を動かす機会になった，④社会参加の機会になった，⑤適度な精神的刺激の機会になった，⑥健康について意識する機会になった，⑦他者と知り合う・出会う機会になった，⑨さまざまな福祉の問題などを理解する機会になったの，９つの選択肢を設け，複数回答にて回答を求めた。その他に自由記述欄を設けた。これらの選択肢は，我々の実施した地域社会とのつながり感に関する意識調査[9]での調査内容を参考に作成した。

ケアラーズカフェの活動については，カフェの活動を知っていたと知らなかったの，２件法にて回答を求めた。ケアラーズカフェの活動への考えについては，①地域の役にたつ，②地域の役には立たない，③行ってみたいと思う，④行ってみたいとは思わない，⑤自分も語りたい，⑥自分は語りたくない，⑦地域とのつながりになる，⑧地域とのつながりにはならないの，８つの選択肢を設け，複数回答にて回答を求めた。その他に自由記述欄を設けた。その上で，なぜそのように考えたのか理由があれば自由に記述することを求めた。

さらにその他に，自由な意見や感想を求めた。

統計学的検討には，比率の差の検定としてχ^2検定を用いた。

表１　対象者の特性

	全体		男性		女性		回答なし		p-value
項目	人数	（%）	人数	（%）	人数	（%）	人数	（%）	
人数	42	(100.0)	12	(28.6)	26	(61.9)	4	(9.5)	
年代	42	(100.0)	12	(100.0)	26	(100.0)	4	(100.0)	.211
10歳代	7	(16.7)	0	(0.0)	7	(26.9)	0	(0.0)	
20歳代	10	(23.8)	6	(50.1)	4	(15.4)	0	(0.0)	
30歳代	6	(14.3)	1	(8.3)	5	(19.3)	0	(0.0)	
40歳代	7	(16.7)	3	(25.0)	3	(11.5)	1	(25.0)	
50歳代	3	(7.1)	0	(0.0)	3	(11.5)	0	(0.0)	
60歳代	3	(7.1)	1	(8.3)	2	(7.7)	0	(0.0)	
70歳代	1	(2.4)	1	(8.3)	0	(0.0)	0	(0.0)	
80歳代以上	0	(4.8)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	
回答なし	5	(11.9)	0	(0.0)	2	(7.7)	3	(75.0)	
就労状況	42	(100.0)	11	(100.0)	26	(100.0)	5	(100.0)	.488
働いている	27	(64.3)	9	(81.8)	17	(65.4)	1	(20.0)	
働いていない	11	(26.2)	2	(18.2)	9	(34.6)	0	(0.0)	
回答なし	4	(9.5)	0	(0.0)	0	(0.0)	4	(80.0)	

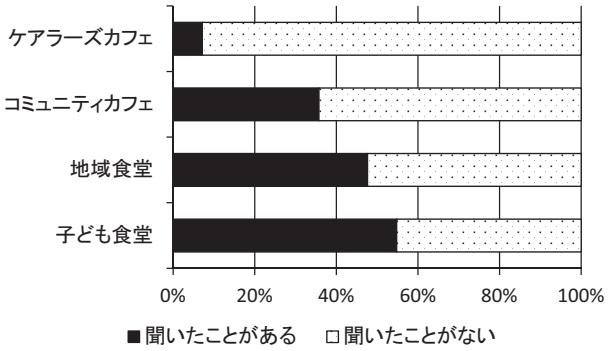

図１　それぞれの用語の認知度

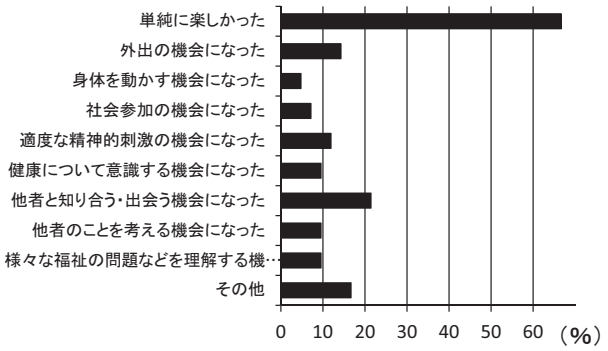

図２　ケアラーズカフェに参加しての感想

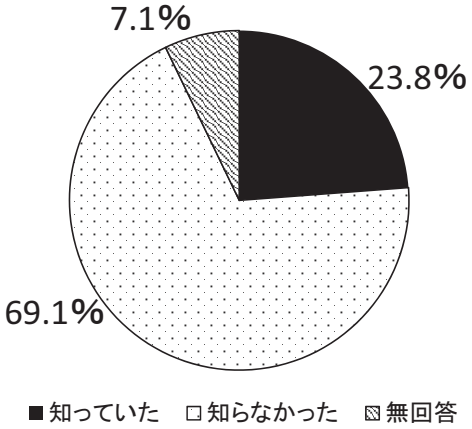

図３　ケアラーズカフェのように特定の悩みを抱える人たちが集まり，語り合う場としての活動を知っているか

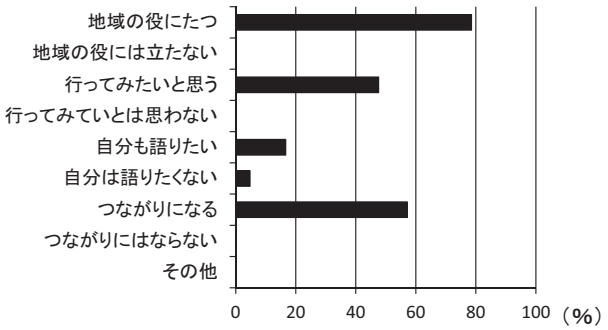

図４　ケアラーズカフェのような活動に対する考え

Ⅲ　結　　果

１．個人属性について

表１には対象者の個人属性に関する情報を示した。年代及び就労状況において，性別による有意な差は認められなかった。よって，以後は，合計人数にて分析を行った。

２．調査結果について

図１にはそれぞれの用語の認知度の結果を示した。子ども食堂と回答した者の割合が最も多く，全体では23名，54.8%の者が聞いたことがあると回答していた。次いで地域食堂20名，47.6%，コミュニティカフェ15名，35.7%で，ケアラーズカフェは最も少なく，３名，7.1%であった。

参加しての感想については，図２に示した。

回答では，単純に楽しかったと回答した者の割合が最も多く，28名，66.7%であった。次いで，他者と知り合う・出会う機会となった，９名，21.4%，外出の機会になった６名，14.3%であった。最も少なかった回答は，身体を動かす機会になった２名，4.8%であった。

ケアラーズカフェのように特定の悩みを抱える人たちが集まり，語り合う場としての活動を知っているかについて，知っていたと回答した者は10名，23.8%であった（図３）。このようなカフェの活動に対する考えでは，地域の役に立つと考える者が最も多く，33名78.6%で，逆に役に立たないと回答したものはいなかった。

無回答者を除き，地域の役には立たない，（カフェに）行ってみたいとは思わない，地域のつながりにはならないという否定的な回答をした者はいなかった。

しかし，カフェで自分も語りたいと回答した者は７名，16.7%であった一方で，語りたくないと回答した者は２名，4.8%であった（図４）。

Ⅳ　考　　察

コミュニティカフェ，ケアラーズカフェ，地域食堂及び子ども食堂という用語の認知度については，子ども食堂が最も高く，ケアラーズカフェが最も低い結果であった。

CiNii Articlesでのキーワード検索の結果では，コミュニティカフェが112件と最も多く，次いで子ども食堂が81件となっている。検索結果で最も古い年は，それぞれ2004（平成16）年，2015（平成27）年であり，子ども食堂を対象とした研究が急速に増加しているととも

に，地域住民の間でも同様に認知が高まっていることが示唆された。

今回，我々のグループは，特定の悩みを抱える人たちが集まり，語り合う場としてケアラーズカフェを開催した。しかし，こうした語り合いの場の存在を認知している者の割合は少ないことが明らかとなった。認知症カフェ及びケアラーズカフェの活動は，認知症高齢者の増加とともに必要性を増していると考えられるが，地域住民の認知度の向上とカフェ活動の継続には，地域住民への広報による周知の必要性が考えられた。また，本研究結果では，参加者の中に，自分は（カフェで）語りたくないと回答している者もおり，語り合う場としてのケアラーズカフェの難しさも示唆された。

自由記述には，地域交流，つながり，外出の機会といったキーワードが散見された。自由記述については，内容が非常に多様であったために十分検討することができなかったが，概ね好評価の記述であり，地域の居場所づくりとして，カフェ活動に対する地域住民の期待を感じる内容であった。

認知症カフェもしくはケアラーズカフェと子ども食堂は，認知症高齢者対策と子どもの貧困対策という異なる施策の下で拡大してきた。しかし，地域住民にとっては，どちらも地域における住民の居場所づくりとして期待されていることが考えられた。2015（平成27）年９月，国連では「国連持続可能な開発サミット」が開催され，「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択された[10]。その中で「誰一人取り残さない」社会の実現を目指し，経済・社会・環境を総合的に扱う17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標（SDGs）」が示された[11]。それを受けて国内でもSDGsの活動を推進する動きが始まり，2018年６月には，SDGs未来都市として，北海道の他，札幌市を含む道内３市町が同時に選定された[12]。SDGsの17の目標には，貧困をなくそうやすべての人に健康と福祉をなどが含まれており，北海道は広域でのSDGsモデルの構築を目指している。

SDGsの目標を踏まえた時，ケアラーズカフェ及び子ども食堂といったコミュニティカフェの活動は，どちらも社会資源として地域住民の居場所としての役割を期待されていると考える。実際に，札幌市が実施した子ども食堂の運営者を対象とした調査では，開設のきっかけや動機，思いとして，子どもの交流・居場所づくりとの回答が最も多かったことが示されている[13]。現在，それぞれの活動は異なる施策の下で展開しているが，今後は地域住民の期待に答える総合的な取り組みが必要と考えられる。

しかし，その一方で，急速に拡がった子ども食堂に対して，開店と閉店が繰り返されるなどの警鐘を鳴らす意見もある[14]。また，札幌市が実施した子ども食堂の運営者を対象とした調査では，運営上の課題として，利用者の確保，資金の確保，寄付などの支援不足の回答が多かったことが報告されている[13]。コミュニティカフェの活動を持続可能としていくためには，これら運営上の課題の解決を地域全体の課題として捉える必要があり，今後展開するであろうSDGsを踏まえた総合的な取り組みとしていく必要があると考えられた。

最後に，本研究は，大学祭企画として実施した「ケアラーズカフェ@北翔大学」にて調査を行っており，調査対象者が少数かつ限定的であることは本研究の限界である。しかしながら，大学祭という多様な人々が集まる場所での調査結果となっている点では，地域住民の意識を一定程度反映しているものと考える。

Ⅴ　ま　と　め

本研究は，コミュニティカフェをはじめとする地域の居場所づくりに関連する用語の認知度を明らかにすることを目的に，地域住民に対して質問紙調査を実施した。

その結果，ケアラーズカフェの認知度は低い一方で，子ども食堂の認知度は高いことが明らかとなった。今後，ケアラーズカフェの活動を持続するためには，地域住民への広報による周知が必要と考えられた。

また，ケアラーズカフェは，子ども食堂とともに，地域住民において居場所づくりとしての役割を期待されていると考えられた。これらの活動を持続的に行っていくためには，運営上の課題の解決を地域の総合的な取り組みとして捉えていく必要があると考えられた。

付記

本研究は，平成28～29年北方圏学術情報センターによる研究助成を受けた。

謝辞

本研究の実施にあたり，質問紙調査にご協力いただいた地域住民の皆さまに感謝いたします。

文献

１）内閣府：ソーシャルキャピタルの豊かさを生かした地域活性化，滋賀大学・内閣府経済社会総合研究所共同研究，地域活動のメカニズムと活性化に関する研究会報告書，http：//www.esri.go.jp/jp/prj/hou/hou075/hou75.pdf(20180717)

２）吉田修大，尾形良子，佐々木浩子　他：ケアラーへのサポートを実践するコミュニティカフェ：ケアラー

ズカフェ@北翔大学の取り組みを通じて，北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要，８，207-215（2017）
3）朝日新聞社CSR推進部編：認知症カフェを語る，ともに生き，支えあう地域をめざして，メディア・ケアプラス（東京）（2015）
4）武知一編・監訳：認知症カフェハンドブック（大５刷），クリエイツかもがわ（京都）（2016）
5）厚生労働統計協会編：４認知症支援対策，国民の福祉と介護の動向・厚生の指標増刊，第64巻，第10号，pp. 177-180（2017）
6）厚生労働統計協会編：２子どもの貧困対策推進法の制定と子供の貧困対策大綱の策定，国民の福祉と介護の動向・厚生の指標増刊，第64巻，第10号，pp. 212-213（2017）
7）吉田祐一郎：子ども食堂活動の意味と構成要素の検討に向けた一考察－地域における子どもを主体とした居場所づくりに向けてー，四天王寺大学紀要，第62号，p. 355-368（2016）
8）柏木智子：「子ども食堂」を通じて醸成されるつながりの意義と今後の課題－困難を抱える子どもの参加と促進条件に焦点をあてて－，立命館産業社会論集，第53巻，第３号，p43-63（2017）
9）佐々木浩子，吉田修大：地域住民における地域社会とのつながり感に関する意識調査－ソーシャル・キャピタルの概念定義を基にした考察－，北翔大学北方圏学術情報センター年報，vol. 9，p. 89-95（2017）
10）国連広報センター：2030アジェンダhttp://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/(20180717)
11）国連開発計画（UNDP）駐日代表事務所：Sustainable Development Goals SDGs，持続可能な開発目標（SDGs）とは，http://www.jp.undp.org/content/tokyo/ja/home/sustainable-development-goals.html (20180717)
12）内閣府地方創生推進事務局：SDGs未来都市及び自治体SDGsモデル事業の選定について，https://www.kantei.go.jp/jp/singi/tiiki/kankyo/teian/pdf/result01.pdf(20180717)
13）札幌市：子ども食堂など地域の子どもの居場所，札幌市内の子ども食堂など地域の子どもの居場所の現状（実態把握の結果），運営団体アンケート調査結果，http://www.city.sapporo.jp/kodomo/torikumi/ibasho/documents/uneidantaianke-to.pdf(20180717)
14）三宅正太：「子ども食堂」は,「おとな食堂」になっていないか？－おとなの理想と都合で開店して閉店！子どもの声なき声に耳を傾けて！, ひみつ基地, 2016年07月号，vol. 41, https://children.publishers.fm/article/12350/(20180717)

Recognition of terms related to the making of 'own place' in community residents

Hiroko SASAKI[1)], Takehiro YOSHIDA[2)]

Abstract

This study carried out inventory survey in community residents to clarify the recognition of the term related to the making of 'own place' including the community coffee house.

As a result, it was showed that caregiver's coffee house had lower recognition than the children's dining room in community residents. It was thought that the public information to community residents was necessary to continue a project of caregiver's coffee house.

In addition, the caregiver's coffee house is expected to play a part in the making of 'own place' in community, together with children's dining house. It was suggested that it was necessary to solve the problem of management for sustainable project.

Keywords : community resident, making of own place, recognition